



みんなでへいわをそだてよう
憲法9条Tシャツ販売中!

信楽在住の版画家・宮本一さんの作品を使用しています。
日本国憲法は、日本国民だけでなく日本に住むすべての人の
ものなので『国民』を『市民』としました。

ご購入は碧いびわ湖の共同購入、TEL、Eメールから!

- ・サイズ S/M/L どちらも横幅はゆったりめ。
- ・カラー ゴールド/ライトグレー
- ・価格/2,700円(税込)

うち500円が「手づくり市民メディア」の
活動資金として寄付されます。



特集にご登場!
石田紀郎先生の
半生に触れる2冊

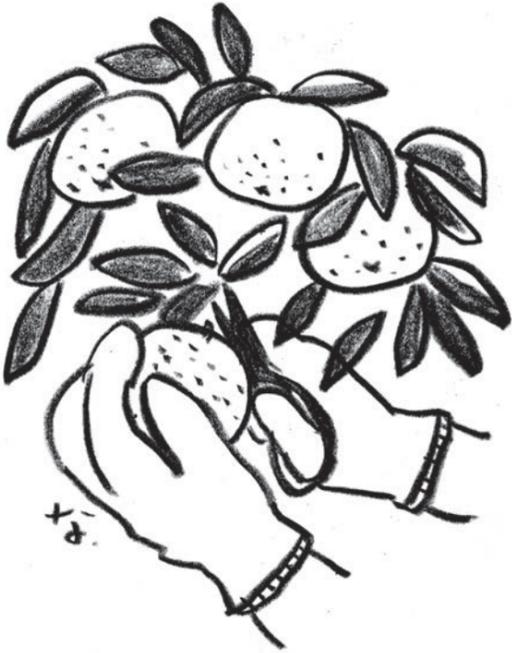
『ミカン山から省農薬だより』

石田紀郎著/初版 1988年/北斗出版
百姓と研究者が、2人3脚で省農薬ミカン栽培に取り組む様子が
仔細に描かれています。

新著 絶賛発売中!!

『現場とつながる学者人生
—市民環境運動と共に半世紀』

石田紀郎著/2018年/藤原書店
琵琶湖、ミカン山、カザフスタン・アラル海、福島…
これまでに石田先生が関わってこられ、そこに暮らす人々と共に
歩んだ数々の公害現場での取り組みを知ることができる1冊で
す。石田先生の語り口にぐぐぐと惹き込まれますよ。



手づくり市民メディア
あまいろだより

vol.36
2018.9.15

省農薬ミカンのこと。



あまいろだより(天色便り)第36号
特集/省農薬ミカンのこと。
編集/あまいろ探偵団
(綾牧生・岸田知之・北岡七夏・きむぎかん・志堂未来・中野和子・藤井朋子・森優子)
表紙タイトルロゴ/岸田知之
発行日/2018年9月15日
発行/特定非営利活動法人碧いびわ湖
～大切なことを他人まかせにしない。自分たちで力をあわせてつくる～
TEL 0748-46-4551 FAX 0748-46-4555
Eメール info@aoibiwako.org
ブログ http://aoibiwako.shiga-saku.net/

びわ湖の森を元気にするkikitoペーパーを使用しています(びわ湖の森の開伐材活用)

特集 省農薬ミカンのこと。

大学生が販売するミカンがある。

京都大学の自主ゼミ「農業ゼミ」が四十年前から
害虫の調査や販売など、農家さんと二人三脚で作っ
ている省農薬ミカンである。

農業中毒による高校生の事故死から起こった農業
裁判をきっかけに、なるべく農薬を使わないミカン
栽培がはじまった。

最近でこそ無農薬や減農薬の作物を選べるように
なってきたけれど、一九七〇年代の農薬を使うこ
とが当たり前で、除草して殺虫して見た目のいい美
味そうなミカンを作ること求められる中でのス
タートとはどんなだっただろう。

四十年続けてこられた驚きと、省農薬ってどんな
の?という単純な疑問を胸に、農業ゼミのマネー
ジャーである京都大学農学部森林科学科四回生の藤
井黎さんと、元京都大学教授でNPO法人市民環
境研究所代表の石田紀郎さんにお話をうかがって来
ました。

石田紀郎さん



滋賀県高島の生まれ
です。

藤井 黎さん



学部では木の根っこの
研究をしています。



* 農業裁判について
和歌山県海草郡下津町大窪。一九六七年、
低毒性を謳った殺虫剤「ニッソール」を散
布していた松本悟さんが中毒症状で死亡す
る(悟さんは帽子付き防水着、マスク、手
袋、ゴム長靴をつけ当時考えられる最も安
全な服装で作業を行っていた)。六九年、
両親は農業会社とそれを許可した国を相
手に民事訴訟を起こす。七七年、毒性を知
りつつ使ったとして、一番では原告が敗訴。
八四年、控訴審で大阪高裁が和解を提案
し、国は応じなかったが会社が二五〇万
円を両親に支払うことで和解。
裁判と並行して、悟さんの叔父にあたる
仲田芳樹さんが新たにミカン山を開き、七
四年、なるべく農薬を使わないミカン栽培
への挑戦が始まる。農業裁判を研究者とし
て支援してきた石田先生たちは、七八年、
農業ゼミとして省農薬ミカン園の病害虫の
発生調査を始める。八六年に裁判の和解
金でミカン山近くに建てられた小屋は「悟
の家」と名付けられ、農業や農薬のことを
考えている人たちに開放され続けている。



あまいる探偵団(以下、あ) 農業ゼミは年間通してどんな活動をしているんですか？

藤井黎(以下、藤)

夏と秋に一回ずつミカン山に行って、ミカンの木の害虫調査をしています。全部で約一千本ある木のうち、五十本サンプリングして、主枝全体に何%くらい害虫や病気が発生しているかというのを、一本の木を二人で三分間かけて見てレベル分けします。四十年前に石田先生と初期のメンバーの人が確立した「見回り法」という方法です。



あ 販売もやってもらえるんですね。藤 そうですね。販売の告知や注文のラベルを作って、販売もします。京大農学部に近い人は、来てもらってそこで直接受け渡しもするんですよ。そのときは、フェイスブックで話もするので、自分が全然知らない人がミカンに思い入れを持って買ってくれたり、はたまた自分の知ってる教授がふいつと現れて買ってくれたり。

あ 石田先生、自主ゼミという形をとられているのはどうですか？ 石田紀郎(以下、石) 大学の正規の科目とちがう、そういうグループがいっぱいあるんですよ。もう出来上がっていることばかりで、おもしろいんですよ。学生がいろいろと自主的に勉強して議論して、それが大学の雰囲気と反映して、大学のカリキュラムも変わっていくような。そうじゃないと学生がお客になっちゃいます。学生はお客じゃなくって主体のはずやんね。



だって学生でミカン売る奴いないでしょ。売るとはどいうことか、省農薬ってどいうことか、消費者から「くさったミカン売りやがって！」というクレームもあるから、そういう時に何をしゃべるか考えるでしょ。かしこになると思いますよ。

あ 藤井さんは農業ゼミに入って、ミカン山の作業や販売を通して気がついたことありますか？ 藤 やっぱりとつながり、出会いってのは一番感じます。去年は農業ゼミ設立四十周年といつこ

とで、ミカン山で同窓会をしたんですよ。そうしたら、OB、OGの人達のご家族も含めて六十人くらいの人に来てくれて、「愛されてるんだな」とか、そこで色々話をして「この世代の人はそんなことまでやってたのか」とか、見えない発見がありました。

販売するときにも、くさりがあったらどう対応するかとか、それは難しいです。売るときも「おいしいミカンですよ」と言えないんです。人それぞれ美味しさの感じ方はちがうから。うちのミカンは最近どんどん甘くなってきていますけど、以前はすっぱくて昔ながらの味で、だから好きだったって買ってくれた人も多かった。だけど甘いのが好きな人もいるし、どうしようかなとか、答えはないです。だから、「味が濃くて酸味と甘みのバランスがとれないミカンです」と言っています。

石 今ね、彼らの代はあんまり苦労してない、ミカンの味も収量も安定してるから。一九七二年に植えた木だから、だいたい五十年目くらいかな。木が二十歳になるくらいまでは酸っぱい。二十〜二十五歳過ぎたらぐわあって甘さが出てくる。今、一番いいときをやっているんです。藤 そうなんです。今は見回り法で害虫を探しても、全然見つからないねっていう状態で、新入生に教えようとしても逆に「苦勞みたいな。クレームは、ミカンの腐りくらいかな。防除剤は使っていないです。あ この四十年間の中では、一番大変だったのはいつ頃ですか？

石 ルビローウムシという害虫の天敵になる蜂を園に入れた時(一九八〇年)、その後二〜三年間は一切何もなかったんですよ。本場にきつ油を撒いてカイガラムシを窒息死させる昔からある方法、それもやめたんですよ。農薬裁判が終わって、その余韻がまだまだある頃の話。ミカン植えて十年くらいのこと、まだ若い酸っぱいミカンを、我慢して支えて買ってくれた人がいた。省農薬ミカン園を始めた二代目、仲田芳樹さんの中にもうんと緊張感があった。生産者にも、消費者にも、邪魔しに行っていた僕らにもやっぱ緊張感がありました。また、農薬の問



題が終わってないという意識を皆が持っていた頃でしたから、頑張ってるよ。

しかし、百姓の仲田さんがよく決断してくれたと思います。いつでも喧嘩になりました。「お前が言うたからやっただけやろ」「そんなことおれが言うわけないやろ」と。下手したら決裂することになるかも。でも、決裂したらこの園がもたなくなる、それだけは避けなかんっていうことを最低限のところまで持つわけでしょう。その中でどう喧嘩していくか。そういうことができる仲っていうのはやっぱ面白いですね。僕は「農薬まいてや」と仲田さんに言いました。そういう関係ができていたから消費者の人にも信用してもらえて、そういう意味では他でできないことができました。

『省農薬』に込めた思い

あ 消費者として気になるのは、「省農薬」と「無農薬」の違いです。今、無農薬を選びたい消費者が増えてるんじゃないかなと思うんですけど、いろいろ意見が多分寄せられるんじゃないかと思うんですけど。石 たぶんね、僕らが始めた頃は日本が農薬を一番大量に、しかも毒性がきついのをまだ使っている時代で、強力な敵と戦う気分分やらないとダメな時代でした。今は日本の農業生産量も下降してきて、農薬使う量はそんなに減ってはいないと思うんですけど、でも毒性の強いやつがなくなった。だから藤井君らの世代がどういうふう

で、僕の定義と彼らの定義とは違ってもいいと思います。ただその中で、「農薬はなるべく使わないほうがいいよな」ということで合意してる。

僕は「省農薬」という言葉を「農薬は省くべき存在である」、こう決めて使ったんです。作物が何か、風土があつたか、寒いのか、百姓の技術や、少々見た目が汚くても受け入れてくれる社会かそうでないか。そういうのが全部絡まって『省農薬』っていう農法は成り立つやろ。うちの園だけじゃあかんわけやね。歩き方はいろいろあってもそれでええやないか、ということ。『省』という言葉を使っただけからいつかはミカン農家みんなが農薬なしで、あるいは農薬を極限まで減らしてゴールしよう。

あ 一緒に目標に向かって歩んでいくための方法なんですか？ 藤 前提として、農薬っていうのは農家さんの手助けになる。その上で、できるだけ減らしたほうがいいっていうのは、作り手と食べ手の健康と環境汚染の面でそうですよ。大量に石油も使いますし。どう向き合っていくかっていう点に関しては、程度の問題と選択の余地について二つの点だと思っています。程度の問題っていうのは、省農薬でも化学物質に敏感な人っていうのは反応しちゃうと思いますし、健康な人でもごく微量でも蓄積量は問題ないレベルかもしれないけれど影響があるかもしれない、難しい。あ 「省」の字を取りたいと思う事はないですか？

あ ありますよ。やるうと思えばできると思うんですけど、それでも安定した栽培ができなかつたら意味ないですよ。でも無農薬の農家さんを見てみると、すごい努力がかかっているのがわかります。収量も少ないし、できる範囲も狭いですよ。僕も全然知らないで言えた立場じゃないですけど、それで体壊したら元も子もないっていうか。作り手の面から見たら少し農薬を使っただけで減らしたら、買手の面からしたら選択。無農薬じゃないと買わないって考えている人がいるなら、そうですか？ 言うしかない。僕たちは省農薬でやっていて、

今年はこの農薬をこの量撤きましたと書いた紙を添えて売ってるんですけど、それで納得して買ってくれる人がいるならそれでいいと思っただけです。でも一方でそれでダメだと言っ人が増えて、省農薬ミカンが売れなくなってるんだら、その時は考えないといけないですね。

見えにくくなった農薬の害

あ 省農薬ミカン園を始められた頃には、はっきりとした大きな敵があつて、大変だったけど見えやすかつた。でも今は見えにくくなっている。そこが難しいポイントなのかなあ。石 藤井君、何年生まれ？

藤 九十五年です。石 琵琶湖の魚が農薬で死ぬのは九十五年くらいから出ないから。七十年八十年代頃はしよちゅうパーって魚が死んでる。安曇川の河口で魚が死んでたり。やっぱ体験がないから僕らが言ってるのが本当に通じてるかどうかわからない。でもまあないほうがいいっていうのは頭ではわかる。それで彼は実践してるしね。僕らの時は、急性中毒で明日死ぬみたいな話あったけれどそれがなくなっただけで、実は、僕らが始めた時と今と、ペースとしてあるのは一緒やと思うんです。

例えばね、一九七〇年代終わり頃にアトピーの調査をしたと思ったの。農業ゼミのメンバーだった保健師さんに言ったら、「アトピーの子なんて見つからんよ」って言われてね。それで十年後、アトピーの調査を本気でやらんとしたら、「石田さん、今はアトピーでない子を探す方が難しい。そういう面では、事態がものすごく悪くなっている。あ そうですか？

石 確かにね、死ぬとか目が見えなくなるとかの明らかな障害を引き起こすような害は減ったかもしれないけれど、藤井くんらの世代もちょっと心配なんですよ。実は、よう探し出してないだけじゃないかと。科学で証明できる事ははしれてる。急性中毒はわかりやすい。慢性中毒はほとんどわかってない。慢性中毒はわかつたってしょうがない。ならんようにせん

と。放射能汚染による影響もそうですよ。直ちに病気になる事はありません。って当たり前ですよ。そういう時代に生きてるんちゃうかなあ。そうゆう意識を社会がもたんと。彼ら若い世代がこの農業ゼミでの時間を通して、一緒に考えていってほしいと思います。

あ 買う側には、農薬がゼロじゃないとあかんっていうよりも、ゼロに向かつて動いているのかどうか知りたいという思いがあるように思います。でもそれはミカン園にとってはすぐリスクがあるということも、話せば分かると思います。

石 昨年、二代目の仲田尚志さんが急逝されて、今年から大柿さんという方が後継者になってくれることになりました。彼が、新規就農者から一人前の百姓になっていく過程を、消費者も注文をつけながら見守ってほしいなあと思っます。それに地元で減農薬でミカン栽培をやっている人がサポートしてくれることになって、今までにない展開がね、生まれてきています。それで、新規就農者でも「こまめやれるやん」というふうになって、それを支える消費者グループがあるんですよ。だから省農薬ミカンを買ってくれる人も、彼の成長を自分のこととして喜んでくれると嬉しいなって。それができたらやってくる意味がぐっと増える。農薬ゼミを叱咤激励してください。消費者のクレームがあつたほうがいいんです。クレームがいくと考える。優しい消費者にまあいいやって言われたらアカンのです(笑)。私は後ろに下がって見えています。

あ またミカン山にも邪魔してきたら。裁判後に建てられた「悟の家」もありですね。中高生を対象に、泊まり込みで合宿する企画なんかもあつて面白いかも。藤 大柿さんも、実際にミカン山にいらんなら来てもらって、農業交流をしたいってことも言っています。石 本来は「悟の家」は、農薬のことを考えてくれる人が来て泊まれる場所があつたらいいね、っていう、そのために作つたんです。どんどん使ってください。

あ 遊びに行きます〜！ (省農薬ミカンは毎年 碧いびわ湖で販売しています)

日本にあるもの

<裸足で駆け回って遊ぶ孫娘。あるときおばあちゃんが来てその娘に皮のブーツを履かせた。なんでブーツ？と思うと、トラックがやってきて、その孫娘を連れて行った。おばあちゃんは孫娘の目を見ることさえできなかった。それが9月、新学期の始まりの日のこと。>

カナダの先住民たちは、欧米の帝国主義のもと長年様々な迫害を受けてきたけれど、その中でも現代に深い爪痕を残しているものの一つが寄宿学校(residential school)制度。子ども達は親元から無理やり引き離され遠い寄宿学校に入れられた。そこでは、自分たちの言葉を話すことを禁止され、兄弟たちと一緒にいることも禁止され、食事は十分に与えられず、教師である神父やシスターからは獣のごとく扱われ、ありとあらゆる虐待を受けてきた。

虐待を受けてきた人たちの傷は深く、そのトラウマを忘れるために、酒やドラッグに助けを求め、中毒に陥る。言葉を奪われ、家族



との絆を絶たれ、自分の故郷に帰ることができずにいる人たちが今現在もたくさんいるという。

そんな状況で、地域社会を立て直すために先住民たちはいま力を得ようとしている。冒頭のお話は、そのエンパワメントのための『儀式』に出席して聞いた話だ。昔からの儀式を執り行いながら、登壇者たちが自分の受けて来た虐待の経験を吐露し、苦しみを分かち合い、同時にお互いに癒し合う。

彼らにとってこの『儀式』を再び執り行うことは、心からの願いであり、同時に将来への大きな希望であり、またそれがエンパワメントの象徴ともなる。『儀式』が地域社会の存在の証であり、それがあつた迷っている子どもたち(故郷に帰ってこれない人たち)の道しるべであり続けると、固く信じている。

この儀式に参加して痛感したのは、彼らのこの儀式が、日本の各地で執り行われている儀式とよく似ているということ。モンゴロイ

ド同士、私たちの文化は底辺で通じあっているのだ。火を燃やして死んだ人たちの霊を慰めたり、杉の小枝を海に流して祈りを捧げたり...そこには大地の神々への信仰が根本にあるのだろう。そしてそれは、自然を資源とみなして搾取し続けてきた西洋の帝国主義文化と、相反する営みなのだ。

じゃあ日本は？と考えたとき、パンクーパーに住む友人は、日本人の芯にある自然信仰を主張する。日本人は無自覚だけど自然を心から愛していると。「親の仇」のごとく草を抜き木を伐る人たちがたくさんいるけれど、確かに、私の周りの子育て中の母たちは、子どもと一緒に畑を作り、森を歩き、野を駆け回っている。確かに、私の住む滋賀には琵琶湖があり、この湖を大事に思っている人たちがたくさんいる。

何よりも、この亜熱帯気候の日本では、偉大なるかな、自然が自らを癒す力を持っている。災害が多いということがそれを証明している。あとはここに住む人間がどれだけ大地への信仰を思い出すことができるか、なのだろう。それを奪われたカナダの先住民たちが必死で取り戻そうとしている姿を、私たちは覚えていなければならない。